
虹の旅人

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の旅人

【Nコード】

N0027N

【作者名】

沖川 英子

【あらすじ】

少年と異国からの旅人との、短い交流の物語。

虹の向こうはあまりに遠い。
それでも彼らは追い求める。

タグロは走る

タグロは走る。

バナナ、パイア、パンダナス、明るい緑の木々が生い茂る熱帯の森の中を、獣のように駆ける。ゴム草履とは思えぬその速さ。腕には缶詰と水、少量のビールを抱え、厚い唇には笑みをたたえて。

タグロは走る。褐色の風になって走る。黒い瞳には喜びがはじけている。きらきらと輝く。

タグロは走って、走り抜けて、やがて広場に出る。森の中にぽっかりと開いたその場所は、タグロの祖父のそのまた父の時代、遠い国からやってきた人々が開墾した畑の跡だ。本人たちはとうに故郷へ帰ってしまい、主を無くしたタロイモやバナナがすっかり野生化している。

森の端から、タグロは慎重に辺りを見回す。

”オキョキョキョ、オキョキョキョ”

”ツピー、ツピー、ツピー”

と鳥が鳴く以外、物音はしない。

誰もいないのを確かめて、タグロは歩みを進める。古い畦の跡を踏み、午前中の雨でできたぬかるみを上手に避け、畑の向こうに見える廃墟、古い農具置き場へと近づく。

そこが、彼の住処。

荷物を持っているせいで顔がぬぐえない。雨季独特の強烈な湿気と蒸し暑さが幾筋もの汗を作る。その絶え間ない流れをまばたきでやり過ごし、タグロは古い小屋の前に立つ。そして、弾む声で呼びかける。

リチロ、ばくだよ。

中で人の動く気配がする。

やがて扉が開いて、タグロよりずっと年上の、髭面の男が顔を出す。タグロとその腕の中の物を見て、にっと笑う。

タグロもにっと笑う。

リチロはタグロの荷物を嬉しそうに受け取り、中に入るように促す。タグロは得意満面の笑み。嬉しくて、リチロの役に立てたのが誇らしくて、招きに応じて小屋に入る。

タグロを通しながらリチロは慎重にあたりを見回す。そして誰もいないのを確認すると、器用に足で扉を閉める。

あとには鳥の音がするだけ。

二人の秘密基地の周りでは、何事もなかったように風が吹いている。

リチロ

リチロはタグロよりずっと色が白い。そして、この島の人間たちに比べてずっと背が高い。そのわりに体つきは貧弱で、タグロから見ればひよろつとしてゐる。この島の人間でないことは、一目でわかる。片言の英語は話せるけれど、食べられる植物や毒のある生き物は知らない。

リチロの本当の名はもっと長いのだが、それはタグロには発音しにくく、どう頑張っても「リチロ」になってしまう。しかし当の本人はそれが気に入ったようで、以来彼の名は「リチロ」になっている。

小屋の中は長年ほったらかしのわりには小奇麗に片付いている。リチロが掃除したのだらう。明り取りの窓から差す日が光の道を作る。ほの暗い小屋の中、タグロは荷物を避けて適当に座る。リチロは缶詰と水とビールを置くと、青いリュックから一枚の紙を取り出してタグロに渡す。タグロはわあっと歓声を上げ、それを手に取る。異国の写真が、物資を調達するタグロへの礼となる。リチロにとっては他愛のない、けれど、タグロにとっては力ネ以上の宝物。見るたびに、今すぐ走り出したいくなるような、胸が締め付けられるような、不思議な思いに駆られる。

遠い遠い見たこともない国は、タグロにとっては年寄りの夜語りに登場する伝説の王国と変わらない。島では見たことのない顔立ちや肌を持つ人々、奇妙な衣装、踊っているような不思議な文字。とても、本当にあるとは思えない。

けれども、それは確かにこの世にある。写真がそう証明している。それを思うと、タグロはいてもたってもいらなくなる。この人たちに会いに、不思議な風景を見に、知らない風に吹かれに行きたくなる。

今日の一枚は山の写真。この島では見たことのない、ゆるやかな裾野を持つ単独峰。頂には雪を被り（タグロは本物を見たことがないが、教科書で習ったので知っている）、堂々としたたずまいなのに空気に溶けてしまいそうに儚い。

リチロのようだ、と、タグロは思う。

リチロは沢山のことを知っている。タグロはもちろん、島の大人たちでさえもよくわからない遠い国のこと、有名な本のこと、国と国とのやり取りのこと、その他沢山の難しいこと。とてもややこしくて、タグロの頭がこんがらがってしまうこともある。そんなことを話すリチロは村長よりも堂々としていて、どっしりと落ち着いていて、タグロの目にはとても大きく見える。

それなのに、時々リチロは今にも消えてしまいそうに見える。それは彼が旅人だからなのだとタグロは思っている。

リチロはある日ふらっとこの島にやってきた。他の多くの観光客と同じように、半そで半ズボン、リュックサックという出で立ちで港に現れた。違ったのはその顔つき。何かを探しているような、しかもそれを早く見つけなければと思っているような焦燥に満ちた瞳。島の人間はよそ者の様子には敏感だ。彼の尋常ならざる雰囲気はすぐに島中の知る所となり、人々は彼が何か良からぬことを企んでいるのではないかと警戒し始めた。その空気を察してだろう。リチロは滞在していたゲストハウスを引き払い、懐っこい島の子供たちの中でも特に仲のよかったタグロに、宿代わりになる場所を尋ねた。それが、この古い農具置き場だ。

以来一ヶ月とちょっと、リチロはここに住んでいる。これが島の人間にばれると面倒なので、タグロは友達にも家族にも内緒にしているし、ここへの行き来にはひどく気を遣っている。

タグロは一度、何をしにこの島に来たのかリチロに尋ねたことがある。いつも穏やかな顔で笑っているリチロは、その時は真剣な顔で答えた。

虹の向こうを、探しに。

その言葉の意味はよく分からなかった。虹なんてこの島では珍しくもない。ちよつとスコールが降れば、いつでもどこでも虹は出る。だからタグロは、

虹の向こうつて、ここもそうだと思うけど。

当たり前のように言った。事実、海の向こうだとか、山の向こうだとか、気象条件さえ合えば、どこから見たってここは虹の向こうになるだろう。海の向こうからフェリーに乗ってきたリチロだって、ここがその場所と言ってもおかしくないはずだ。虹の向こうを目指しているならここが終着点で、ならばずっとここにいればいい。(タグロは何でも知っていて穏やかなこの異国人を、兄のように慕っていた。いつまでもこの島にいればいいのと思っていた。)

けれど、その言葉を聞いたリチロは、

タグロ、それは違う。

優しく、しかしきっぱりと言いつつ放った。

君にとってそうでも、俺には、違う。

そうして、ふつと遠くを見た。

そのときのリチロの寂しい笑顔、思いつめたような遠い眼差しを、タグロは忘れることができない。

今この瞬間も、リチロは時々、遠い場所を見る。タグロの他愛もない話、誰々の家の豚が仔を産んだとか、誰それが森の精霊に化かされたとか、そんなことを笑って聞きながら、ふと会話の途切れた瞬間に、その目は遙か遠くを見ている。

心がさ迷い出ている。

もうすぐ、

タグロはリチロの心を引きとめようとす。リチロがふっと夢から覚めたようにこちらを見る。

雨季が終わるよ、リチロ。

タグロは笑う。リチロの白い顔をひたと見すえて笑う。

プワラの白い花が咲いた。そしたら雨季は終わるんだ。プワラが黒い雲を呼んで大雨が降る。そしたら、きつと虹を見られるよ。

リチロは少しタグロを見て、ふっと笑う。そして、

そうだな。

ぐしゃぐしゃとタグロの頭をなでる。

そうだと、いいな。

ふと呟いたリチロの声は、それでも寂しげに響く。
頭上の手の重さが、タグロには妙に悲しい。

リチロの手紙

タグロの予想通り、プワラの花が大雨を呼び長い雨季が終わった。天の底が抜けたような土砂降りの翌日、空は深く澄んだ青に輝き、太陽は喜びに溢れこれでもかとばかりに照り付けている。見慣れた風景が全て磨き上げられて、つやつやと輝いている。

乾季の始まりだ。

それでも、日に一度、夕方にはスコールが降る。雨季のように一日中降ることがないというだけで、本当にかからかに乾ききつてしまうというわけではない。

だから、太陽がなかなか顔を出さない雨季以上に、実は虹を見やすくなるのだ。

そのことをリチロに話そうと思い、タグロはまた森へ向かう。今日の手土産は新鮮なタタ魚とトラデ貝。どれもタグロ自身が今日の午前中にリーフで獲ったものだ。中でもトラデ貝は、以前リチロと二人で沢山獲って山分けにしたことがある。彼はその味が気に入ったようだったから、きつと今日も喜ぶはずだ。

そのときはタグロが父親から譲り受けたカヤックを使ったのだが、リチロは昔カヤックをやっていたとかで、漕ぐのはタグロよりも遙かに上手だった。確実に潮目を読んで緩急をつけ、ずっと滑らかに海面を行く姿に驚いたものだ。おかげで、コランヌ浜から小さな岬を廻って釣りのポイントのママル浜へ行くのに、大して時間がかからなかった。その代わりリチロは潜水が全くできず、釣果のほとんどはタグロの手によるものだった。

乾季になれば海にも出やすくなる。また、リチロと釣りに出よう。カヤックはママルの浜に残してあるから、今度はそっちから出ればいい。楽しい計画にタグロのほほが緩む。

いつものように軽快に森を抜け、広場の手前、パイアの木陰から慎重にあたりを見回す。誰もいないのを確認して、タグロはまっ

すぐに小屋へと向かう。網にどっさりの獲物を見て、リチロは何と言っただろう。タグロは笑みを浮かべ、小屋の戸を叩こうとする。タグロの顔からふっと笑みが消える。振り上げた手を止める。いつもと違う。

タグロは獲物を地面に置き、そつと扉を開ける。日の光にほりりが舞うのが見える。思ったとおり、小屋の主の姿が見当たらない。留守にしているのか。タグロは一歩中に進む。そして、これがただの留守でないことを知る。

あの青いリュックがない。

タグロは狭い小屋の中をぐるぐると回る。リチロの痕跡はどこにもない。彼は、完全に消えてしまったのか。

ふと、リチロがいつも座っていた椅子に目がいく。その上に小さな紙切れを見つけ、タグロは走り寄る。

親愛なるタグロ、

メモの書き出しはそんな一言、英語の定型句で始まっている。

君は見たか、昨日の夕空を。あのとんでもない大雨の後の、この世のものとは思えない壮絶な夕焼けを。

タグロは読み進める。リチロの話す英語はたどたどしいのに、文章はとてもきれいだ。青いインクで記された筆記体が美しい。ふとそんなことを思う。

俺は、視界いっぱい夕空と新鮮な空気に誘われて外へ出た。そして深呼吸をして空を見上げたその時、とうとう見つけたんだよ。これまでに見たことない、大きな虹だった。完全なアーチを描いていて、七つの色がはっきりと見えた。（そういえば、リチロの

国では虹は七色と言われているのだと、タグロは思い出す)

それはマラウ山の向こうにかかっていた。呼ばれている、と俺は思った。

マラウ山の向こうにはママルの浜がある。カヤックを漕ぎ遊んだあの穏やかな浜。遠くにはリーフが見え、その向こうにはトラツカ諸島が連なり、その先は果てしない大海が広がっている。

タグロははっと気づき小屋を飛び出した。網を蹴飛ばしてしまっただが、持ってきた獲物のことなどもう頭がない。リチロのメモをしっかりと握り締め、農具小屋から離れた古い山道へ一目散に向かう。間に合うだろうか。いったい、いつリチロは出発したのだろう。

タグロは走る

古い道は草が茫々と茂り、横から低木が飛び出していて身軽なタグロでも走りづらい。体も大きく森に慣れていないリチロは、きつと苦労したはずだ。

だから、きつと間に合う。ちゃんと会える。

そう思いながらも、タグロは不安でならない。他にさえぎるものがない島の風景にあるから大きく見えるものの、マラウはとても小さな山なのだ。この道こそ古くて登りにくいものの、新しい山道であれば子供や年寄りだつてすぐに山頂にたどり着く。リチロがくれた写真の、あの山とは全然違う。いくら森に慣れていないとはいえ、大の大人であるリチロが登りきるのにそう時間がかかったとは思えない。もしかすると、とつくに下山してママルの浜に向かっているかもしれない。

リチロがどこかへ行ってしまうのは寂しいことだが、止められるわけがない事はタグロにも分かっている。リチロは旅人で、タグロは留まる者だ。彼の生き方は彼のもので、タグロの生き方はタグロのもの。そんなこと、まだ子供のタグロにだつて分かる。

それでも、せめて何か一言、言つてあげたい。別れの言葉も見送りもない旅立ちなんて、あまりに孤独すぎる。

はあはあと弾む息がうるさい。目に、耳に、流れ落ちる汗が邪魔だ。それでもタグロは足を止めずに走る。一番の友人と別れるために、走る。

目の前の木立が段々とまばらになる。頂上が近い。

タグロは走る。森の獣に、褐色の風になる。

走る。走る。走る。

目の前が開ける。マラウの頂上にたどり着く。

マラウの頂上は数十年前まで物見台の代わりだった。だから、海に向けた方面は未だに低木の一本も生えず、丈の低い草だけが生い茂っている。ママル浜への道もその方向にある。

弾む息を整えながら海への道に目をやって、そしてタグロは見る。

一艘のカヤックが今まさに白い砂を離れ、波を蹴立てて走り出す。

カヤックを押す人物は黒い短髪、島の人間にしては白い、けれど日に焼けた肌を日光に晒し、勢いに乗ったカヤックに乗り込む。

手には長いパドル。波をうまく乗りこなし、すつと背を伸ばして彼は進んでゆく。

振り返らず進んでいく。

その姿は、山頂からはあまりにも小さい。頼りない。

それなのに、なんて大きく見えるんだろう。

タグロの褐色の瞳に、いつの間にか涙が溢れていた。それをこぶしで乱暴にぬぐい、タグロは異国の友人、リチロの姿をしつかりとその目に刻もうとする。彼が振り返らずに行こうというなら、タグロの出る幕はない。できるのは、ただ、見守ることだけ。

そして、旅立つ者へ、はなむけの言葉をかけるだけ。

「リチロー！」

彼に聞こえるだろうか、獣のようなタグロの叫び、その呼びかけ。聞こえていなくてもいいのかもしれない。ただ、彼を忘れない誰かが、そして彼に続く誰かが、いるだけでいいのかもしれない。

「リチロ、サヨナラ！」

見えなくてもいい。

タグロは、小さくなる姿に手を振る。リチ口の教えてくれた、彼の国の別れの言葉を叫びながら。思えば、彼が最初に教えてくれた母語が別れの言葉というのも、いつか来るこの日を予期していたからかもしれない。

リチ口はやがて小さな点となり、水平線に溶け、消えた。

彼の残した航跡も、風と波に揺られ、やがて消えた。

タグロはずっと、マラウ山の頂上に座り込みリチ口の行った先を見ていた。そして、「虹の向こう」の正体を考えていた。

カヤツクを漕ぐリチ口の最後の姿が瞼に残っている。ずっと伸びた背中。ためらいのない漕ぎ方。滑らかに進むカヤツクのリズム。あの写真にあった山のような、儚く、しかしどっしりとした姿。いつか、自分も旅立つのかもしれない。リチ口と同じく、「虹の向こう」を探しに行くのかもしれない。

けれど、そこでリチ口とタグロが出会うことは、きっと、無い。どれだけ仲がよくとも、それぞれの見る虹は違うのだ、きっと。

夕風が吹いてタグロはくしゃみをする。そして立ち上がり、少し海を見て、古い山道を駆け下っていく。あの小屋を片付けなくてはならない。誰もいなかったように、跡形も無く。

タグロは走る。重さなど無いように、流れる雨雲のごとく走る。その唇には、小さな笑みが浮かんでいる。

最後の手紙

タグロ、君もいつか俺と同じ道を歩むんじゃないかと、俺は思っている。ここではないどこかを、ここでは手に入らない何かを探して、あてもなくさまよう旅を。

だって、君は俺に興味を示したじゃないか。

よそ者の俺の、一番の親友だったじゃないか。それに、写真を見ていた君の顔。

きっと、他の人から見たら愚かなことなんだ。ありもしない虹の向こうを追い求めるなんて。

そんなのは俺だって百も承知だよ。

それでもじつとしてられない。

見たことの無い景色を求めて俺は、俺たちは、さ迷わずにはられない。

タグロ、幼い虹の旅人、お前はきっとその素質を持っているんだ。

さよなら、タグロ。

二度と会えないと思うが、君の親切も、笑顔も、忘れない。

いつか君が虹の彼方に立たんことを。

リュウイチロウ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027n/>

虹の旅人

2010年11月12日21時47分発行